「先日君に告白をした件なんだが、やっぱり答えはノーかな？」
伊吹は口をつぐむと少しの間考えこくりとうなづいた。
「そうか・・・改めて言われると応えるものがあるが、それが君にとってウソ偽りがない気持ちなんだね」
「ごめんね殿下」
「いや良いんだ。むしろそうやってきっぱりと断ってくれた方がこちらも諦めがつくよ」
そう言いながらディアボロはポケットの中から小さな小瓶を取り出した。
「これ何？」
「アスモデウスから預かってきたんだ。美容ドリンクなんだらしい」
「へえ、アスモこんな美容ドリンク飲んでいるんだ」
伊吹が手に取って小瓶を眺めると、ローズレッドの液体が揺れた。
「ああ。発売前の商品でアスモデウスはモニターを頼まれているらしい。伊吹からも参考意見が欲しいと言っていたな」

「そうなんだ。試してみよ♪」
そう言って伊吹は小瓶のふたを開けるとグイっと飲み干した。
「んー・・・味は悪くないかな？」
そう言いながら伊吹がレビューを送るためにD.D.Dを手に取ると突然体の力が抜けた。
「あれ・・・？」
テーブルにうつぶせになった状態で動くことができない伊吹の視界に、ディアボロの感心したような顔が映っていた。
「さすがアスモデウスが持っているだけあるな。効果てきめんだ」
「殿下・・・もしかして・・・だました？」
「悪い。どうしても君のことが諦められないんだ」
そう言いながらディアボロは息吹を抱き上げるとベッドに横たえ軽く口づけをした。

「あの小瓶の正体は一時的に体の力を抜く薬なんだ。どうしても思いを遂げたい相手がいるとアスモデウスに相談したら、こっそりこの薬をくれたんだ」
「もしかしてこれって・・・抵抗できないようにするやつ？」